技術者からの視点

●第13回●

ミケランジェロの視線

藍野大学非常勤講師　木下　親郎

記憶に残された素材から独自の作品を創作したミケランジェロ

フィレンツェ（イタリア）のウフィツィ美術館にイタリアルネッサンスの巨匠ミケランジェロの聖家族の絵がある。ウフィツィ美術館に入りボッティチェリの「プリマヴェーラ（春）」、レオナルド・ダ・ビンチの「受胎告知」、特別室にある「メディチのビーナス」などの名品に圧倒されてようやく画廊の端にたどりつく。そこから、窓越しにアルノ川などの現実の世界を見てほっと一息をつく。すこし落ち着いてから、反対側の棟へと歩き、最初の部屋で目にするのがミケランジェロの「聖家族」である。母マリアがキリストを上方に抱き上げている直径一二〇センチメートルの油絵で、円形の額縁（トンド）に収められている。フィレンツェ市民ドニの依頼で製作したので「ドニトンド」と呼ばれる。そのころフィレンツェ市民の間で評判の高かったレオナルド・ダ・ビンチの下絵「聖アンナと聖家族」を意識して描いたといわれるミケランジェロ二〇代の傑作である。

同時代の画家・建築家のヴァザーリが、その著書「芸術家列伝」に「ミケランジェロは一度見たものを忘れない優れた記憶力を有している。そして、それをいつでも使うことができる。彼は自分の全ての作品を覚えているので同じものを作らない」と書いている。

「ドニトンド」にはこのことに関係した逸話がある。ルカ・シニョレッリという当時の画家が聖家族を円形の輪郭で囲んだ絵を描いており、当時フィレンツェを支配していたメディチ家の当主、ロレンツォ・イル・マニーフィコの宮廷に置かれていた。この絵は現在ウフィツィ美術館にある。ミケランジェロは少年時代にロレンツォの厚遇を受けメディチ家宮廷に逗留していたので、彼のするどい視線がこの絵に注がれたのは間違いない。ルカ・シニョレッリの絵では、キリストは、中央に座っている母マリアの右ひざを支えとして立っている。母マリアとキリストの描き方は異なるが、どちらも背景にギリシャ時代を思わせるような裸体の群像が描かれており、全体として似たところがある。ルカ・シニョレッリの絵がミケランジェロの記憶に残っていたに違いないと言われている。ローマのバチカン美術館にある有名な彫刻「ラオコオン」は、ミケランジェロがローマにいたときにローマ古代遺跡から発掘された。「ラオコオン」にも彼の視線が注がれた。現在ルーブル美術館にあるミケランジェロの大理石彫刻「奴隷」の姿態は、ラオコオンの息子の像に似ている。

ヴァザーリが書いているように、ミケランジェロの視線は見たものを頭に焼き付ける強力なものであったに違いないが、彼は記憶に残されたものを素材として、それを大胆に展開させ、独特の作品として作り上げている。

「ドニトンド」も「奴隷」もルカ・シニョレッリの「聖家族」や「ラオコオン」とは全く異なり、ミケランジェロにしか作れない作品である。

常時、課題を頭の中に置いているのが優秀な技術者の〝秘密〟

本誌前号のこのコーナーで技術者の鋭い視線を紹介したように、技術者も、眼にしたものから独創的なものを創り出す能力が必要である。学会、シンポジウム、新製品発表会、工場・研究所の訪問など視線を注ぐ機会は多い。街角や車窓からの風景にも視線を注ぐ価値がある。ところで、学会やシンポジウムではスライドを使っての講演が多いが、最近の発表用機材の進歩により画面には動画が氾濫し、複数の画面に異なる画像が示され、内容の説明よりも製品や技術の革新性を誇示するのに力点が置かれているようだ。しかし、技術者の中には、このような、短時間しか示されない画像や展示品から、その内容を事細かく描き出す魔術師かと思うほどの能力を持っている人がいる。

その魔術の秘密は、非凡な記憶力や想像力にあるのではなくて、そのような問題を常時考えているというところにあるようだ。開発技術者は、開発あるいは設計している機械の問題点を常に考えている。彼らの頭の中には、開発品の全体構想図が描かれており、課題となるところは、もやもやとした状態になっている。いわば、頭の中には未完成ではあるが全体構想がくるくると回っているのである。したがって、たまたま、視線が自らの課題と似通ったものを捉えると、すばやく反応して、それがたとえ一瞬であっても、あるいは一部分であっても、目にしたものを強く焼き付けることが可能となるのである。多くの場合、眼がとらえるものは、いつも考えているシステムの中にある小さな要素部分に対応するものにすぎないが、それでも常時考えているシステム全体構想と対比させて、眼に入った画像だけから、その部分の入力部から出力部までの詳細を描き出すことができるのである。

このように、開発技術者は常に課題を頭の中に置いている。夢の中に解決策があらわれることもある。また、一つの課題を解決すると、それに関連した新しい課題が生まれてくるのは普通の事柄である。このような状況にある開発技術者に思う存分仕事をさせるには、新しい機種の開発に際しては、新規技術の適用を一件に止めるぐらいの手堅さが必要であると教わったことがあった。

技術管理者の任務は易しい問題を見過ごさないこと

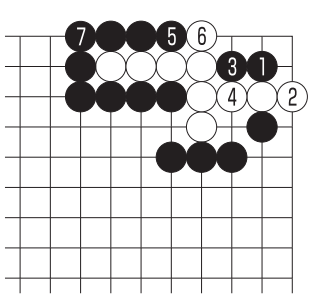
ところで、新たな技術への挑戦は、優秀な技術者にとって魅力がある。したがって、彼らはそれにのめり込み、易しい事柄を見過してしまう危険性を持っている。そのために管理者が存在するのだが、技術開発の管理者は優秀な技術者である場合が多く、難題が出てくると、問題解決に自ら乗り出そうとしがちである。しかし管理者は難題の解決を能力のある技術者にまかせ、自らは易しい問題を見過ごさないように眼を配らねばならない。最先端製品の不具合原因の多くが、基本的な約束事を実行するのを忘れていたことにある。技術管理者にとって最も大切な任務は技術管理である。

P40の解答

■詰め碁

「正解」

黒1のツケが急所です。白は2のサガリよりありませんが、続いて黒3を決めてから黒5と狭めて三目中手でしとめます。



■詰め将棋

1二角成　同玉　1三歩　同桂　1一金　同玉　1三竜　1二歩合　2三桂まで、九手詰。

「解説」

1三歩で、2三金は、1一玉、2一歩成、同玉、1二金、同玉、1三歩、2一玉、2三竜、2二金、1二歩成、3一玉で大海に逃がす。2三桂の筋を読み切れば案外容易です。